

地文字

源氏物語の
ヒロインたち
対談



源氏物語の
ヒロインたち
〔対談〕

円地文子

講談社

源氏物語のヒロインたち〔対談〕

昭和六十二年三月二十七日 第一刷発行

著者——円地文子

© Motoko Fuke 1987, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三―三―三 郵便番号二三 電話東京三―九五―二二

印刷所——大日本印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一五〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-202230-3(0) (文1)

目次

『源氏物語』と私

(インタビュー) 円地文子 7

藤壺・空蟬

(対談者) 永井路子 19

葵の上・夕顔

杉本苑子 35

六条御息所

竹西寛子 53

朧月夜・花散里・末摘花

大庭みな子 69

紫の上

清水好子 85

明石の上

田中澄江 101

朝顔齋院・玉鬘

尾崎左永子
117

女三の宮

近藤富枝
135

大君・中の君

津島佑子
151

浮舟

富岡多恵子
169

光源氏をめぐる女たちの哀歓

瀬戸内寂聴
185

男たち・女たちの群像

田辺聖子
201

『源氏物語』の輪郭

218

口絵・装画 長谷川青澄
装幀・本文レイアウト 中島かほる

源氏物語のヒロインたち〔対談〕

田
地
文
子

『源氏物語』と私

——最初に先生と『源氏物語』との出会いを……

円地 出会いというのにしちゃ、あんまり古過ぎるんですけどね。江戸時代の後期ですけども、草双紙というものがたくさんはやりまして、その草双紙の一つに柳亭種彦の『修紫田舎源氏』というのがあるんです。非常に売れたものらしいんですけど、『源氏物語』をもとにして、時代は足利時代にしてあるんですよ。

そこで光氏という言葉になってるのが、光源氏に当るんです。そのほか、女なんかもみんな名前が変えてありますし、一種の『源氏物語』のアダプテーションですね。直してあるわけです。ちょっとお家騒動などからんでいて、まあ、本文はそんなに大したものじゃないと思うんですけど、草双紙ですから、ページごとに絵がついているわけです。絵がずつとあつて、ご承知だろうと思いますが、周りに小さい字で書いてあるわけですね。絵がかなり場をとっているんですよ。

で、その絵が三代目かの豊国になる人なんですけど、五渡亭国貞っていうんです。この絵が非常にきれいなんです。昔のことですから、一年に二度ぐらい出たんじやないかと思うんです。二冊ぐらい出たんじやないかしら。木版で、一冊がこんな薄い（一、二センチ）もんですけどね。絵が全部ついてて、表紙は色刷りなんです。それにきれいな男や女が全部描いてあるんです。それも一つの魅力だったらしいんですけどね。時代は文化文政の終わりごろだろうと思

いますけど、非常に流行したんです。一般の女や、町の人のほうが主に読んだんだろうと思いますけどね。

私の父方の祖母なんかがそれを読んでおりましたものですから、私がまだ字なんか読めない時分に、よく『田舎源氏』の話というのをして聞かせてくれたんですよね。それがそもそも『源氏物語』というものを知るようになった初めですね。

その『田舎源氏』の初めのほうに、光源氏を足利光氏と書いてあつて「光源氏に比す」なんて書いてあるのね。それから藤壺は藤の方つて名前になつてゐるんですけれど「藤壺の宮に比す」とかね、そういうふうなことがちよつと横に書いてあつて、きれいな絵が描いてあるわけですよ。それで覚えたんです。それを祖母が話してくれたんで、話の筋も、お家騒動なんかからんでゐるんですけども、まあ、『源氏物語』をずいぶんとつてありますね。ほとんど『源氏物語』の改作という形になつてゐる。

それを市井の女たちや何かから、大奥でも読んだらしいのね。あんまり流行したんで、おしまいには当時の官憲の忌諱に触れたらしいんです。種彦は脳卒中で死んだという話もあるし、それともちよつと捕まりかけて亡くなつたという話もあるんです。これは調べればすぐ分かるでしょうけど、はつきり私、知らないんです。その絵が誠にきれいだったんで、そもそもそれで覚えてますね。それが初めだと思ひます。

その前後に、これは『源氏物語』を直したもんなだということを聞かされてね。で、私が『源氏物語』というのを一番初めに見たのが小学校の初めごろだと思うんですけど、有朋堂文庫という、日本の古典の全集があつたんですね。有朋堂というのは、そのあとにできた岩波とか朝日とかに比べると雑書が多くて、ずいぶんつまらない本が多いんですけど、雑書が多いということが、私なんかいろんなものを調べるときに非常に役に立ったんです。

その有朋堂文庫に、たしか四冊本だつたと思うんですけど、『源氏物語』があつたんです。私の父（上田万年^{せんねん}）が監修なんかしてたんじやないかと思うんですけど。それでうちへも有朋堂文庫が贈られてくるんです。そのなかに『源氏物語』があつて、金文字で「源氏物語」と書いてあるんです。私なんかそのときは子供時分ですから、これが『源氏物語』なんだと思ったのね。まるで昔の『源氏物語』、つまり王朝に書かれた『源氏物語』がそれであるような感じがしたんですよね。

それを見たのが初めて、うちにあつたもんですから、小学校の高学年ぐらいから読み出したんでしょね。ですから私は字引を引いて読んだってことないんです。いい加減な頭註がありまして、それと本文と照らし合わせて読んだ。初めは一人称と二人称、そういうもののはつきり書いてないでしょう。それがちよつと分からない。一番初めに『源氏物語』でつまづくのはそれなんですけど、人称やなんかはつきりしない。ここまで光源氏が話しているのかと思う

と、女の人の話に変わっていたりする。そういうことが、よく読んでいれば分かるんですけど、分らないから、それが難しかったんですね。

だけど、そこそこをどうやら通り越して、すぐやめてしまわないで、「須磨」あたりまで引きまして、それからあとポツポツ読んで……つまり正編を全部ですね。それからあとの「宇治十帖」なんかも自分でどうやらこうやら読むようになった。だからいい加減なもんなんですよ、私のそもそものこのは。

——『円地源氏』誕生について……

円地 十一年ぐらい前になるかな、口語訳したときに初めて、そういういい加減なことじゃ困るんで、主に玉上琢弥たまがみたくやさんの『源氏物語』の語釈のついでるのをもとにして口語訳したんです。そのときもただそれだけではないかと思って、研究会みたいなものを持ちまして、ひと月に一ぺんぐらいずつ、国文学者の方や作家の方に集まっていたいて、私が一応原稿にしたものをもとにしてみんなで読み合わせて、おかしい、もう少しこうしたほうがいいというようなことは直しまして、いろいろ研究してまとめていったわけです。ですから前後五年半ぐらいかかっているでしょうね。それでようやくと完成したわけです。六十過ぎてからやったわけで、途中で網膜剝離なんか起こして目を悪くしましたし、いろいろ支障はあったわけですけど、もと『源氏物語』が好きなもんですからね。そんなに辛いとは思わなかったですね。ある方は、

あんな齡の者にあんなことさせて、途中で死んじやいやしなかつて言つたそうですけれども、当人は、どんなことがあつても、結局はできあがるんじやないかと思つていたんですね。その通り、どうやら五年半かかつて十巻ですけど、口語訳することができたわけです。

谷崎先生のは難しいんですね。若い人には読みこなせない、ということは聞きました。それとあのとき、まだ谷崎先生も、日本の古典という非常にきちんとしたものとして、座り直すようにして訳されたと思うんですね。そのためにいい加減にしないという態度が、逆に堅くなつたというところがあるかもしれませんね。まあ、二度や三度訳してらっしゃるから、あとのほうは変わつてきていると思いますけどね。

戦後に訳されたのが、全部訳されているわけです。初めてのときは戦争中でしたから、藤壺と源氏の密通の巻のそこは訳すことができなかったんです。あそこが抜いてあるんです。だからその点で完訳ではなかったわけですけどね。二度目のときに全部お入れになつたようですね。

——先生のお好きなヒロインというのは……

円地 そうね、『源氏物語』の女つてのは、それぞれみんな魅力がありますけれどね。私はだれが好きかしらね。

六条御息所ろくじょうのみよすけなども魅力ありますよ。今までは割に六条御息所というのは、悪形でもないけれども、そんなふうに扱っているような部分が多いんですね。決してそういうもんじやな

いと思うんです。やつぱりあれは、藤壺なんかとちょうど拮抗する大女性なんですよ。

つまり恋人としても、源氏の相手にする女が、上位の恋人と、自分と同じぐらいのこと、自分より下の女と三つぐらいに分けられるんです。六条御息所は、齢も上ですが上位になる女性で、いろいろ葵祭や何かのことがありまして、別れるようになるんですけど、やつぱり源氏の中にはずいぶん深く入ってる女性の一人だと思いますね。それからまた私たちから見ると魅力もあるんですよ。

まあ、私、いろいろ好きなのありますよ。例えば夕顔のような、ほんとにはかないような、そのくせ男をひきつけずにはいられないような女も好きだし、それから朧月夜のような非常に色っぽい人ですね。奔放な恋愛をする女、ああいうのも好きです。

それから全然目立たないんですけども、花散里なんか私、好きですね。色にもおいても全部薄くて、あんまり源氏が情熱の対象にするというような人ではないんですね。だけどやつぱり人柄が非常に穏やかで優しくて、そしてある程度頼みにもなるといふ人なもんだから、初めにちよつとした恋愛がもとで面倒みるようになるんです。例の紫の上や何かとは違いますけど、第三夫人ぐらいでしょうかね。

明石の上は身分はそうよくないんですけど、子供を産みますから、側室としては紫の上に次ぐ者になるんでしょうけど、花散里は大臣の娘か何かですから出はいいんですよ。花散里を